

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 年度～2008 年度

課題番号：19520070

研究課題名 (和文) アメリカにおける「福音派」の多様性についての研究

研究課題名 (英文) The Diversities among American Evangelicals

研究代表者 森 孝一

同志社大学 神学部 教授

研究者番号 30121601

研究成果の概要：

2008 年はアメリカ大統領選挙の年であり、1980 年代以来、大統領選挙に大きな影響を与えてきた「宗教保守」(福音派)の動向と影響力が注目された。アメリカ合衆国におけるプロテスタント保守派である「福音派」は、ここ数年、従来の中絶反対、同性愛婚反対だけではなく、地球温暖化問題、アフリカにおけるエイズ問題、世界各地における人権侵害の問題など、これまでになかったような主張を行うようになってきた。このような福音派の多様化が大統領選挙の行方にもどのように影響を与えるかが注目された。

近年のアメリカにおける福音派のこのような「多様性」の実態を明らかにするために、2007 年 9 月と 11 月、2008 年 11 月に現地調査を行った。現地調査はインタビューを中心に行い、インタビューはテープ起こしを行い、今後の研究のための基礎資料を作成した。

1980 年代から近年まで、アメリカの内政において大きな影響力を保持してきた「宗教右派」は、急激に影響力を減少させてきている。その背景には、あまりにも戦場的で排他的なあり方に対して、世論が批判的になったからであろう。しかし、福音派の勢力は依然として衰えていない。オバマ政権の行動を今のところ慎重に注目していると思われる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2006 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学、アメリカ合衆国、宗教保守、宗教右派、福音派

1. 研究開始当初の背景

ギャラップ調査機関によれば、アメリカ合衆国における「福音派」はアメリカ総人口の40%を占めている。「福音派」の社会的・政治的影響力については、近年、日本においてもようやく認識されるようになってきた。

その原因となって出来事は、第1に、2004年アメリカ大統領選挙までの最近の数回のアメリカ大統領選挙において、「福音派」あるいは「宗教右派」が、大統領選挙の趨勢を決定するほどの大きな影響力を持っていることが、日本においても認識されるようになったことであろう。

しかし、「宗教右派」が米大統領選挙において、大きな影響力を持つようになったのは、1980年のレーガン大統領の第一期目の選挙が最初であり、すでに20年以上の歴史を経過してきている。筆者は1984年の拙論「ファンダメンタリストの政治化現象：1980年代の『新宗教右翼』の研究」（『同志社アメリカ研究』20）において、「福音派」の政治的影響力を取り上げて分析した。これは日本における「宗教右派」についての最初の研究論文となった。

「福音派」が日本においても注目されるようになった第2の原因は、アメリカの国内政治だけでなく、外交・安全保障の分野においても、「福音派」が大きな影響力を持っていることが明らかになってきたからであろう。「9.11」以降のブッシュ大統領の演説には、多くの宗教的言説を見ることができ、ブッシュ大統領は個人的にも「福音派」の影響を受けていると告白している。また、アメリカとイスラーム世界の対立・抗争の背景となっている「パレスチナ・イスラエル問題」に対して、「福音派」の一部は、その聖書理解のゆえに、ユダヤ系アメリカ人以上にイスラエル国家を強力に支持している。このような「クリスチャン・シオニスト」はしばしば、「キリスト教原理主義者」と呼ばれている。

近年、日本の学界においても、またマスコミにおいても、上記のような理由で「福音派」についての関心は高まっているが、しかし、「福音派」についての本格的な学術的研究は、いまだになされていない。著者は1985年の拙論「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」（『基督教研究』第46巻第2号）において、「ファンダメンタリズム」と呼ばれるアメリカの保守的プロテスタントについての本格的な歴史的研究を行った。

しかし、上記の二つの拙論においては、「福音派」、「宗教右派」、「キリスト教原理主義者」についての明確な定義付けは行われていなかった。これは当時のアメリカにおける研究状況においても同様であり、今日においても、いまだに明確に定義され、整理されて理解されているとは言い難い。とくに日本においては、マスコミだけでなく学界においても、正確に理解され、定義され、区別されてはいない。

2004年アメリカ大統領選挙までの過去数回のアメリカ大腸両選挙において、福音派と呼ばれる宗教保守が、とくに共和党において、大きな政治的影響力を発揮してきた。

しかし近年、その福音派が多様化していると言われてきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アメリカにおけるプロテスタント・キリスト教保守派を代表するグループである「福音派」(Evangelicals)の実態を、その成立と歴史、そのキリスト教理解・聖書理解、今日の社会的・政治的スタンスとその影響力を分析することにより、総合的に明らかにするところにある。

筆者は1966年の拙書『宗教からよむ「アメリカ」』（講談社選書メチエ）において、「宗教右派」を「政治化した福音派」と定義した。ギャロップ調査機関の世論調査によれば、自分を「宗教右派」と考えている人は、アメリカ総人口の約15%である。すなわち、アメリカ総人口の40%を占める「福音派」のなかには、「宗教右派」とは立場を異にする人びとが、アメリカ総人口の25%存在しているのである。換言すれば、アメリカの「福音派」は一枚岩なのではなく、「多様性」を持っているということであろう。政治化した急進的な「福音派」が「宗教右派」であるなら、残りのアメリカ総人口の25%を占める「福音派」は、穏健な「福音派」と考えていいだろう。

「宗教右派」についての情報は、かなり日本にも紹介されているが、穏健な「福音派」については、ほとんど紹介されていない。すなわち、日本における「福音派」理解は、その全体像、あるいは実像を理解できていないのが現状であると言えるだろう。

政治化した急進的な「福音派」としての「宗教右派」と穏健な「福音派」は、アメリカ国内の社会問題 (Social Issues) について、どのような見解の違いがあるのだろうか。人工

妊娠中絶、同性愛者の結婚の合法化、多文化主義・宗教多元主義についてはどうか。また、アメリカの外交・安全保障については意見を異にするのか。イラク戦争・反テロ戦争、イスラエル・パレスチナ問題についてはどうか。

アメリカにおける「福音派」の多様性を明らかにすることによって、より総合的に「福音派」の実態を理解することが本研究の目的である。本研究によって、日本におけるアメリカ政治、アメリカ外交についての理解が、より多面的に行われ、より正確にアメリカを理解することが可能になることをめざしている。

3. 研究の方法

アメリカ合衆国における「福音派」に関する研究者との対話、「福音派」のリーダーたちに対するインタビュー、研究書による分析などを通して、アメリカにおける「福音派」の実態と、その「多様性」を明らかにする。

4. 研究成果

(1) アメリカにおける福音派の勢力は、どの程度なのか？

先述したように、ギャラップ調査機関の統計によれば、「あなたは福音派あるいはborn-againのキリスト教徒ですか？」という問いに、「そうだ」と答えた人は、アメリカ総人口の40%を越えている。この数字は驚異的な数字であり、もしそうであるとするならば、福音派の政治勢力としての影響力も、計り知れないものとなる。

この点について、私がインタビューを行った福音派についての研究者、福音派のリーダーは、一人の例外もなく、この数値は大きすぎると感想を述べた。インタビューに答えてくれた研究者、福音派リーダーの共通する意見は、総人口の25-30%であろうというものであった。たとえそうだとした場合、その宗教勢力としての影響力は巨大なものである。日本の政治におけるキャスティングボードを握っている創価学会（公明党）の信者数が、実質的には総人口の6%程度であることと比較すれば、アメリカにおける福音派の勢力の大きさが分かるだろう。

(2) ギャラップ調査機関の統計結果と、インタビューに答えてくれた、研究者・リーダーによる想定値とのギャップの原因を、どのように理解すればいいのか？

ギャラップ調査機関の上記の質問に対して、「自分は福音派である」と答えた人が40%いたという事実は否定できない。推測できることは、「福音派」(Evangelicals, born-again Christians) という用語が、統計調査で質問

された人びとに、どのような意味で受けとめられたのか。それは、研究者・リーダーの「福音派」の定義・理解とは異なっているのではないか。

Evangelicals という用語は、アメリカ宗教史において、その意味するところは変化してきた。本来の意味は、カトリックに対してプロテスタントを意味する用語であった。どいつにおいてプロテスタントを意味する言葉は Evangelisch であり、英語の Evangelical はそれに対応するものであった。

アメリカにおいては、19世紀末までは、Evangelicals はプロテスタントを意味する用語であった。ところが、19世紀末に進化論や聖書解釈の方法論である「文献批評学」などの近代的な思想を、キリスト教として受け入れるかどうかによって対立が生じた。これが後に「ファンダメンタリスト論争」と言われるものであり、近代思想との共存を主張する「近代主義者」(Modernists) とそれを拒否する「根本主義者」(Fundamentalists) に、アメリカのプロテスタントは二分されることとなった。

20世紀初頭から第二次対戦終了までのアメリカ・キリスト教界は近代主義者が優勢であったが、1950年代より、かつての根本主義から、より多くの人びとに受け入れられるような保守的プロテスタントの形成の動きが現れてきた。もっとも有名な人物は、ビリー・グラハムである。彼らは19世紀のEvangelicalsとは異なって、「保守的」なキリスト教信仰理解を保持する者という意味で、Evangelicals という名称を使用したのである。日本においては、これを以前の「福音主義者」(プロテスタント) と区別するために、「福音派」と翻訳されてきた。

ギャラップ調査機関の「福音派」の定義は、①聖書を解釈なしで文字通り直解的(literal)に受けとめること、②born-again(再生・回心)の宗教体験を重視すること、③他者への伝道に努めること、の三点を福音派の信仰理解の特徴と定義している。

私がインタビューを行った研究者とリーダーの福音派の定義は、このギャラップ調査機関の定義とほぼ同じであると考えていだろう。それでは、ギャラップの調査で自分を福音派であると答えた人びとは、「福音派」をどのように理解したと考えればいいのか。この問に対する答えを考える上で手がかりになるのは、カトリック教徒のなかで19%の人びとが、自分を福音派であると答えているという調査結果である。先にも述べたように、本来 Evangelicals という用語は、19

世紀においてはプロテスタントを意味する用語であった。ところが、本来 Evangelicals の対極にあるはずのカトリック教徒のほぼ 2 割が、自分を福音派であると答えているということは、「福音派」という用語が、これまでとはことなつた意味をもって受けとめられているということの証左であると考えていいだろう。私は今日、「福音派」という用語は「保守的なキリスト教信仰理解を持った信心深い人」という意味で受けとめられていると推測している。ギャラップ調査機関の調査結果と、私がインタビューを行った研究者・リーダーのあいだにある「10%」のギャップの原因は、「福音派」という用語の受けとめられ方が変化しているという仮説で説明がつくのではないだろうか。

(3) 福音派は多様化し、変化したのか？

私がインタビューを行った全米福音派連盟副会長（当時）の Richard Cizik とフロリダ州オーランド市のノースランド教会牧師の Joel Hunter は、近年の福音派の変化と多様化を代表する福音派のリーダーである。二人に共通する特徴は、これまでアメリカの福音派が中心的に関わってきた人工妊娠中絶反対と同性愛者同士の結婚の合法化反対以外の問題に、深くコミットしているという点にある。それは地球温暖化の問題である。二人は中絶と同性愛婚に反対であることにおいては、変わりはない。その点では本来の福音派と変化してはいない。二人の特徴は福音派としての社会的関心の範囲を国内問題だけでなく、国際的な問題に拡大したということにある。国際的な問題とは、地球温暖化の問題の他には、世界の貧困の問題、アフリカにおけるエイズの問題などである。Cizik と Hunter は、福音派がコミットすべき社会問題のプライオリティを考えると、中絶・同性愛婚よりも地球温暖化の問題が、より緊急性をもった問題であると考えている。

私はこの二人に代表される新しいタイプの福音派を「グローバル派の福音派」、従来の中絶・同性愛婚反対を主張する福音派を「ローカル派の福音派」と分類する。

「グローバル派の福音派」が地球温暖化問題に関わる動機は、福音派としてのキリスト教信仰理解である。彼等は Creation Care という名称で、この問題を位置づけている。従来の「ローカル派の福音派」を特徴付けるキーワードとして Pro-life、すなわち、神から与えられた生命を守ることがあることは知られているが、「グローバル派の福音派」にとっては、Creation Care としての地球温暖化への取り組みは、神から与えられた生命を

守るための、もう一つの、より緊急性のある Pro-life に他ならない。

私がインタビューを行った、もう一人の福音派のリーダーの Jim Wallis は、1960 年代からの「グローバル派の福音派」であった。しかし、Wallis はアメリカの福音派においては例外的な存在として理解されていたのであるが、ここ数年の間に、「グローバル派」がアメリカの福音派の中で、一定の勢力を持つに至ったと言うべきであろう。Jim Wallis の『神の政治』(God's Politics) がベストセラーになったという事実は、アメリカの福音派のなかに、戦闘的な「ローカル派の福音派」である宗教右派とは異なった、新たな動きを求める潮流が起こっていることの一つの証左であろう。

それでは「グローバル派の福音派」はアメリカの福音派全体の潮流を変化させることに成功したのであるか。その答えは現時点では明らかではない。「グローバル派」の代表的存在であった Cizik が本年 1 月、27 年間その職にあった全米福音派連盟の副会長を辞職するように追い込まれたという事実は、「グローバル派」が未だアメリカの福音派の主流にはなり得ていないことを物語っているのかも知れない。なお、私がセンター長を務めている同志社大学一神教学際研究センターは、今年秋、Cizik を京都に招聘し、公開講演会と研究会を開催することを決定している。アメリカの福音派の多様化の象徴的な存在であり、渦中の人物から、直接近年のアメリカにおける福音派の状況を聞き、議論する機会を持つことも、本研究の一つの成果と言えるだろう。

(4) 2008 年アメリカ大統領選挙と福音派の動向

2004 年の大統領選挙において、ブッシュ勝利の最大の貢献を行ったのは福音派であった。二つの貢献について考えてみよう。一つは、予備選挙においてブッシュ候補が直面した「最大の危機」であったアブグレイブ収容所での捕虜虐待事件(2004 年 5 月)である。自由と民主主義をイラクにおいて実現するためというイラク戦争の大義が、根底から揺らぐようなこの事件は、ブッシュにとって選挙戦中の最大の危機であったと言えよう。しかし、そのほぼ 1 週間後、ブッシュにとって大きな「追い風」が吹き、ブッシュは危機を脱することに成功した。それは、マサチューセッツ州政府が同性愛婚を合法化すると宣言したという報道であった。ブッシュはすぐに、憲法を修正しても、同性愛婚の合法化を禁止するという声明を発表した。イラク戦争

の是非については、福音派は一枚岩ではなかった。しかし、このマサチューセッツ州政府の決定によって、福音派はこの問題について一致団結し、ブッシュを支持したのである。

もう一つの福音派の貢献は、近年急速に増加しつつあったヒスパニック系移民に対するものである。フロリダをはじめとする南部諸州はヒスパニック系移民の多い州であるが、福音派はカトリックが大半のヒスパニック系移民に対して、中絶・同性婚反対で、彼らの票を共和党へと導いたのであった。

それでは 2008 年大統領選挙において、福音派は前回と同様の影響力を発揮することはできたのか。先述の「グローバル派」の福音派のなかには、従来の共和党支持から民主党支持へと立場を変えた者もかなりいたと言われている。私がインタビューを行ったフロリダのハンター牧師は、インタビューのなかで民主党候補であったヒラリー・クリントンからアプローチがあり、中絶に対するスタンスに違いはあるものの、中絶を減らすべきであるという点では一致したと語った。彼は最終的には共和党支持から民主党支持に変わり、民主党全国大会に招かれて、オバマ支持演説を行った。

しかし、大統領選挙当日の出口調査を見ると、福音派は前回とほぼ同様の投票率を示しており、彼らの投票行動も前回とほぼ変わらず、共和党候補に投票していることが分かる。

福音派は前回と同様に共和党を支持したが、彼らの影響力を相対的に弱めるほど、それ以外の要素において、オバマ支持が強力であったということであろう。それは、若者であり、はじめて投票を行った人びとである。

確かに、大統領選挙の度ごとに、大きな影響力を発揮した「政治化した福音派」としての宗教右派は、その勢力を急激に減退させた。1990 年代以来、宗教右派の代表的組織であった「クリスチャン連合」(Christian Coalition) は、存続の危機を迎えている。「クリスチャン連合」に変わって、今日、宗教鶴への代表的組織と見なされるようになった Focus on the Family についても、私のインタビューに答えてくれた John Barner 牧師は、次年度の団体のダウンサイジングは不可避であると語ってくれた。世論が宗教右派から離れた原因は、宗教右派のすべてに反対し、戦闘的になるという活動スタイルに対して、嫌気がさしたことが最大の原因だろう。

宗教右派は確かにその勢力を減退させたが、福音派は今日も依然として、その勢力を維持している。私がインタビューを行った一人の福音派は、「私たちはオバマをじっと見

ている。彼はチェンジについて語るが、何をするようにチェンジするのか、その結果を注目している」と語った。

次回 2012 年の大統領選挙において、福音派はどのように行動するのか。多様化と共に、その行く末に注目したい。

上記のような研究成果は講演、新聞での論述、編著の著作のかたちで公開した。また、私がセンター長を務める同志社大学一神教学際研究センター主催の公開講演会と研究会「2008 年アメリカ大統領選挙と宗教勢力」(2009 年 1 月 31 日)を開催し、研究成果を一般に公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 2 件)

- 1) 森 孝一「アメリカの政教分離を考える」、東京新島講座、2008 年 10 月。
- 2) 森 孝一「大統領選挙と福音派・宗教右派の動向」、京都日米協会 2008 年春季例会、2008 年 5 月。

[図書] (計 3 件)

- 1) 森 孝一、村田晃嗣 (編著)『アメリカのグローバル戦略とイスラーム世界』、明石書店、2009 年。
- 2) 森 孝一 (編)『ユダヤ教・キリスト教・イスラームは共存できるか—一神教世界の現在』、明石書店、2008 年。
- 3) 森 孝一「第 3 章 宗教と社会—なぜアメリカは、かくも宗教的なのか」、久保文明 (編著)『超大国アメリカの素顔』、ウェッジ選書、2007 年。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 孝一

同志社大学 神学部 教授

研究者番号 30121601

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし